

---

# 六花の少女

E K A W A R I

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

六花の少女

### 【Nコード】

N5177BA

### 【作者名】

E K A W A R I

### 【あらすじ】

黒髪黒目の国無き民である主人公、岩鉄<sup>ブルゼン</sup>は、人気の無い雪山のある施設跡へと訪れていた。

「五年ぶり・・・か」

そう、そこは彼にとっては悪夢に等しい記憶の場所。そんな人気のない場所で彼が出会ったのは白髪赤目の少女、六花<sup>リシユリア</sup>。少女は名乗っても居ないはずの彼の名前を呼び、そして「貴方を救いに来たの」そんな言葉を口にする。

その顔は、かつて彼が殺めた少女に酷似していた。

## （前書き）

ばんははろ、EKAWARIです。

この作品は3年ほど前に僕がノートに描いていた30ページほどの読みきり漫画が元ネタになっています。なんてことのない話ですが秀囲気が気に入ってた話です。小説化にするさい、原作である漫画版とはちよくちよく変更を入れたりしているため、元版と全く同じとはいえないんですが、それでもその片鱗を楽しんでいただければ嬉しく思います。

嘘を吐かないで。

僕は僕を写す鏡。

罅割れた先でさあ、歌をうたおう。

「貴方の名前は？」

## 六花りっかの少女

（奇妙な夢を見た）

さくり、さくりと新雪を踏みしめ歩きながら、黒髪黒目の黄色人種、国無き民であるワヒカ人の青年、岩鉄フルレンは、昨晚見た夢に思いを馳せていた。

大きな一枚の鏡。その前に立つ自分と、鏡に映った自分であるはずの違う顔をした存在おとこ。伸ばされた手を掴んだ先でガラスは割れ、暗闇の中、白い少女がじつと自分を見つめる。

「貴方の名前は？」

そう尋ねる少女に答えたのか答えなかったのかは曖昧なまま、夢は朝に解けた。

なんてことはない。ただの夢だ。そうは思うも胸に残るのは、あの夢が今日という日に対する暗示なのかもしれないという感情があるからだろうか。馬鹿らしい。自分の考えがあまりに馬鹿らしい。

なんてセンチメンタルなんだと失笑すら覚えながら、何の変哲も無い容姿の・・・強いて言うならば雪国の人間にしては背が低いくらいか。すれ違っても5分もすれば人々の記憶から薄れそうなほどに特徴の無い顔立ちをした青年は、目的地に向かって歩を進め続けた。

「聞きました？」

呆れるくらいの田舎町では、人々の楽しみなど変わった噂くらいしかないというのか、婦人方が集まれば今日もまた姦しい世間話が始まる。婦人方の集まりになど興味は無いけれど、敢えて避ける気もなかったブルゾンは彼女たちが集まる家の前の道を通り過ぎて歩いていく。自然、その耳は彼女たちの会話の内容もまた拾った。

「また殺人鬼「15」<sup>トルス</sup>が出たって」

「満月のたびに若い娘が襲われるなんて・・・。今回は生きてたみたいだからいいけど、うちのリーシャちゃんだったらって思うと・・・」

「犯人は顔に15の刺青の入ったワヒカ人だって」

ささやかな彼女たちの楽しみであろう世間話だろうが、その言葉には深刻な響きもある。

その内容に何も感じないといえは嘘となる。だが、それでもブルゾンは何も聞いていなかったかのように、無表情を決め込んでただ足を進める。彼女たちが今口にした事件、それはこここのところこの国、弱小国家エリンガスを揺るがしている事件であり、それがただの噂などではないことは知っていたが、見知らぬ婦人方の噂などに立ち止まるわけにはいかなかった。

表情を消すなんて簡単だ。そうだ、簡単に出来る。

何も感じるな。考えるな。そんな資格は僕には無い。そんな言葉を呪文のように己の内に向かって吐きながら、男は山を登る。婦人方の声はもう遠い。山は白銀の雪に覆われて、歩くたびに鹿皮で出来たブーツに重ったるしく白い雪がまとわりついた。幸いにも空は晴れている。雪は昨日のうちに降って今はもう止んでいる。それを

素直に良かったと彼は思った。

(これなら、今日中に行ける)

本当は行きたくは無い。あんな場所本当は二度と行きたくない。だから、もし吹雪でも起こればそれを口実に行くのをやめてしまうのだろう。それほどに自分の精神が懦弱であることは彼はよく承知している。だから、逃げ道を奪うような晴れ空は良かった。

思いつつも、これからと過去を思って、自分の息が乱れそうになるのがわかる。嫌な記憶だ。自分はこうして今此処にいるというのに、昔と今が交じり合ってしまうような錯覚を覚えそうだ。

・・・自分にとって鬼門と呼んでもいい場所に赴くというのは、決意していても尚辛い。その一方で無意識に覚えている記憶がある場所までの道を正確に弾き出す。そう、確かあそこは・・・山の中腹にある寂れた社の裏側、隠れるようにして存在していた。

ざくりざくりと歩を進める。視界一面の白い雪は音を飲み干していくつかのように、静かだ。まるで世界にたった一人で自分が取り残されたかのような、奇妙な感傷すら覚える。

果たして、3時間ほどかけて、そこにたどり着いた。

そう、ここだ。この奥にあった。そう、焼け焦げて片鱗だけが雪に埋もれた状態で僅か残るばかりだけど、決して見間違えるものか。森に隠れるようにして建っていた施設跡。確かにこここそが、悪夢の場所だった。

「5年ぶり・・・か」

ぼつりと、独り言を吐く。寒さのせいではなく声は震え、表情が強張った。

「本当はもっと早く来るつもりだったんだけどな・・・」

記憶が脳裏を掠める。

差し出された少女の映像ネズミに、共に手を握り逃げ出した幼い弟分。それを選択した日。点滅する記憶の欠片。

「僕は相変わらず臆病だから」

皆を置き去りにして、全てを終わらせたとそう思っていた過去。全ての始まりの場所でもある此処で、男は誰に聞かせるでもない懺悔を、告解を行うように吐き続ける。

「でも、もう終わりにする」

こんな言葉を吐いたって、それが死者に届くわけなんてないんだって、わかっていてもそれでも男は、ブルゾンはその気持ちを噓にしないために口にした。

そうして5分ほどはただ佇んでいただろうか。そろそろはじめよう。そう思った矢先だった。

「？」

ふと、視界の端に見慣れぬ異物が混じっている気がして、青年は視線を社のほうへと向ける。

「なんだ？あの白い……」

そこには雪に紛れる様な白い何かが落ちていた。いや、落ちている……であっているのだろうか。それにしてもやけに大きい……。まさか、人？その可能性に気付いて、ブルゾンはその白い何かに走りよる。果たしてそれは6歳児くらいの大きさをした白い子供だった。

「おいつ、生きているのか!？」

まさか遭難した町の子供なのだろうかと内心焦りながら、雪に埋もれたその子供の肩を揺さぶる。少女の体はひんやりと冷たい。それに最悪なことも脳裏をよぎる。けれど、少女は男の焦りを他所にゆっくりと、まるで長い眠りから覚めたかのように体を起こして、振り向いた。

(え!?)

それを見た男の体が、ギクリと強張る。振り向いた少女は、遭難した町の子供にしてはあまりにもおかしかった。

ふわふわとした真っ白な髪に、真珠のような肌、白い服……。理知的な紅い目。雪の中だっというのに半袖の膝丈までのワンピースを身に纏っている。背中についた大きな白いリボン、まるで妖

精の羽のようだ。優美に整った造詣は品があり、浮世離れた印象を与える。その上、そんなに薄着だというのに、少女が寒がっている様子は無い。人間・・・であっているのだろうか、迷信の類を信じていない男でさえそんなことを思わず考えてしまうほどに、目の前の少女は尋常ではなかった。人外の化生といわれても納得してしまうだろう、そんな少女だ。いや、そんなことはブルゾンにとっては問題じゃない。彼にとって最大の問題は・・・それは。

(こいつの顔・・・)

今朝の夢を思い出した。罅割れた鏡の先で、暗闇の中自分の名前を問うた少女。白い白い少女。そして古い記憶。

何を自分は考えている。そんなわけがない。あれはただの夢だ。

「おま・・・」

ブルゾン  
「岩鉄!!」

誰何を問うたために出した男の言葉は、飛びつくように縋ってきた少女の声にかき消された。

「会いたかった。ずっと待っていた。わたしは貴方を救いにきたの」  
まるで本当に知っている親しい相手にするかのように、熱を込めて白き少女はそんな言葉を言う。違和感だらけの言動。おかしい。目の前の少女はおかしいのだ。強張る顔のままにブルゾンは突き放すようにその根本を口にした。

「お前、なんで僕の名を知っている?」

冷ややかにさえ聞こえる声で、名乗っても居ない自分の名を口にした少女に向かって最大の違和感たるそれを言う。けれど少女は全く男の態度に動じるわけではなく、年端もいかない子供としか思えない外見を裏切った、知的な瞳に愁いを湛えて次のようなことを口にした。

「お前、じゃないわ。六花リシユールアと呼んで」

「雪の結晶?」

「そう、わたしは六花リツカ」

ふわふわとしたそんな印象で、どこかの外れたようなことを歌



うように口にするリシューリア。それを苛立ち混じりに睨みつけながら、男は話を戻すための言葉を口にした。

「そんな事はどうでもいい。僕の質問に答えろ」

「じきにわかるわ」

嘘をついているわけではなく、事実だけを告げているといった雰囲気を纏って、雪の結晶を名乗る少女はそんな言葉を吐く。

それを聞いて、嗚呼関わりたくないなと青年は思った。

「もういい」

拒絶の意思を示す言葉をかけて、踵を返す。行くアテがあるわけではなかったが、それでもこれ以上はこの少女に関わりたくはない。ザクザクと、雪を踏みしめて男は歩く。背後からはびよこびよこ、もう一つの足音が可愛らしく鳴っている。ぴたりと足を止めた。そんな彼に倣うかのように後ろから鳴っていた足音もぴたりと止まった。

「・・・・・・・・なんでついてくるんだ？」

振り向かなくても誰が後ろにいるのかなどわかりきっている。そんな中でぼやくようにそう青年は口にした。独り言のつもりだった。だけど、その男の声に応えるかのように、少女は存外に真剣な声音で己の言い分を口にした。

「言っただでしょう？わたしは貴方を救いにきたの。一人にするわけにはいかないわ」

「・・・・・・・・」

わけのわからないことを言う。これほどまでに理解不能な思考の持ち主は初めてだ。可愛らしい童女の姿をしているが、それがいつものこと奇妙なのだ。大人びた話し方もそうだが、人を見透かすような紅色の瞳も合わさって、見た目通りの子供と思うには、あまりにもこの少女は薄気味悪かった。これ以上ついてこられてはたまらない。

だから、撒こうと思った。

スタートダッシュを切る。雪を蹴っ飛ばして、駆ける、駆ける。

「ブルゾン！」

背後から聞こえる少女の声など右から左へと聞き流し、全力でもって縦横無尽に走り抜ける。浮世離れしていたが、それでも相手は子供だ。大人の足に追いつけるわけがない。そうして、ぼたり。額から汗が流れ落ちるほどに青年は走った。

「ここまでくればあのガキも・・・」

ついてはこれないだろうと続けるはずだった言葉は、思わぬ背後からの声に遮られた。

「何故逃げるの？」

真後ろに、白き少女がいた。その事実にはゾッと怖気が走る。つい先ほどまでは、確かに人の気配など他にはなかったはずだ。

「お前・・・」

「言ったでしょう。わたしは貴方から離れない」

その、まるで全てを見透かすような紅い瞳が、記憶に重なって、ブルゾンは弾けた。

締め上げるように少女の首元を掴んで、自分の目線の高さほどに持ち上げる。脳裏に過ぎっていく過去の記憶の欠片。

叩き込まれるように飛来する記憶たちが煩い。今に在りながら過去へと男の意識が放り込まれていく。

アレは白い少女だった。そう、ネズミとそういつていた。打たれた注射。男達の笑い声。紅く染まった手。事切れた少女。赤い血。染まる。意識が、もっていかれる。飛ぶ。トリップする。ボクが、ボクデなくする。

赤く染まった白いネズミ、これハネズミ、ネズミ、ネズミネズミ  
ネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミ  
ネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミ  
ネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミ  
ネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミネズミ

「ごめんなさい」

思考は唐突に現実に戻った。自分の手によって吊り上げている少

女の言葉によって。

そつと、自分を締め上げる男の手に慈しむように己の小さな手を重ねながら、リシューリアはかつて死んだ少女と同じ顔をして「貴方を追い詰めたのはわたし・・・ね」そんな言葉をブルゾンに放った。

「・・・なんなんだ」

どさりと、持ち上げていた少女を落として、男は搾り出すような声で苦くそんなことを口にする。

「なんなんだ、お前」

脳裏によぎるのは、「ごめんなさい」そんな言葉を残して死した少女。カタカタと勝手に体は震えだし、嫌な汗が背中を伝う。今すぐ吐いてしまいたいくらいに気持ちが悪い。そうだ、気持ちが悪い。気持ちが悪いほどに目の前の・・・六花と名乗った少女は、かの少女に似ている。そうだ、似ているのだ。その見透かすような、慈しみと愁いを湛えたような眼差しも、顔立ちも、俺を見る目も・・・。  
(違う、あいつは青い目だった)

そうだ、あいつは青い目をしていた。それに、目の前の少女よりずっと年上だ。だから違う。これは別人。あれではない。そんなはずは無い。

「初めて会った筈だ。なのに前から僕の事を知っているみたいだ」  
それに、リシューリアは答えない。ただ、澄んだ紅い大きな瞳で苦しげに話すブルゾンを見ているだけだ。ただ、その子供に似つかわしくないほどの愁いと理性を帯びた瞳が怖くて、ぎゅつと、男は己の左手で今だ震え続けている右腕をきつく握り締め、弱弱しく言葉をこぼした。目の前の相手に、それによっておこされるだろう内面の揺れに怖れてさえた。

「僕の事は・・・頼むから放つといってくれ」

そう吐き出してから、火を熾して、暖を取る用意を整えた。

「ブルゾン？」

「寝る」

不思議そうな顔をして、成り行きを見守っていた少女に対し、きつぱりとそんな言葉を告げる。

「……………明日は付きまとうなよ」

冬は夜が来るのも早い。雪国ならば尚更だ。日が沈めば、星が天空の主として燦々と輝く。雲ひとつ無い星空、そこに夜の女王たる月の姿はない。

(大丈夫だ、今日は新月。あいつは現れない)

自己暗示のようにそんな言葉を心で唱えて、意識を沈めていく。そうだ、あいつは現れない。現れるはずが無い。自己暗示ではないけれど、それでもブルゾンはそれを信じていた。

(ホントウニ?)

ドクリドクリ、と嫌に心臓の鼓動の音がやけに煩い。

「ブルゾン?」

少女の声が煩わしい。何故、名を呼ぶ。

(呼ぶな、黙れ。やめろ)

記憶の底に封じた声が聞こえる。

『……………だよ、NO.15』

(やめてくれ。あいつは現れたりしないんだ。僕はそんな名前じゃない)

ありったけの心の叫び。そんな中で、闇の中ニタリと5年前の姿をした自分が笑う。

(オレハオマエナノニ?)

留置所。注射器。ネズミ。赤。白の中の赤。血に染まった両手。燃える白の施設。

(……………なんで……………)

ドクリドクリドクリ。心臓は早鐘を打ち続けている。そうだ、これは警報だ。あいつが外に出る時の。だから、彼はその侵食を知った。

「……つ、

……!」

その変化はいうならば突然だった。ゆらりと、眠っていた青年は一瞬にして変貌し、彼女の前へと姿を現した。

残虐に冷め切った黒き瞳に、ゾツとするほどに邪悪な殺気と凄み。彼をよく知っている人間でさえ、別人なのではないかと疑ってしまふいそうなほどに、その人相は変わり果てている。なにより、六花の前にゆらりと立ったその男の頬には、先ほどまでは確かになかったはずの「15」<sup>トルース</sup>を示す刺青が雪明りの中、ボウと左頬に浮かび上がっていた。

男は、射殺しそうなほどに剣呑な視線を少女に向けていた。

「あいつが騒いでもと思ったら、どういふタチの悪い冗談だ？」

モノを見るような目で少女を見下す男は、右手で細くて折れそうな彼女の首を掴み掴んで、嘲るように低く言う。空気感すらも、眠りにつく前とは別人だった。

「ちよつと幼いがそのツラ・・・6年前オレが殺した顔だ」<sup>ツラ</sup>

ネズミだ、と男達に差し出された、白髪碧眼の少女がちらりちらりと男の記憶の端を過ぎる。

「何で近づいた。あの女の妹か？」

「ブルゾン」

その少女の声に苛立ち、男は彼女を掴んだ右手に窒息しない程度の力を込めた。

「ブルゾンじゃねえよ。オレは15だ」<sup>トルース</sup>

吐き捨てるように濁りきった黒い目で言う。危険な男だ。誰が見てもそう思うだろう。返答を間違えれば少女を殺すくらいわけなくする、そういう目をしている。だけど少女は、それまでと何も変わらず、澄んだ紅い目のまま、静かに語るような声で言葉を放つ。

「でも貴方はブルゾンよ。貴方はもう人を殺してはいけないの」

その言葉にまた過去がよぎる。

『君は15。<sup>トルース</sup> さあ殺しなさい』

ガつと、男は衝動のままに、右手で掴んだ少女を頭から木に叩き付けた。

「知ったような口聞いてんじゃねえよ。黙れガキ」

尚も少女は咳き込みながら、それでも強く愁いを秘めた瞳で男を見上げながら言う。

「いいえ……殺したら駄目。もう施設もあの男達もいないんだから」

何もかも知っているかのような言葉。其れを聞いて、男は弾けるように笑った。

「ははっ、当たり前だろ！オレが皆殺したんだからな。筋が良いとあいつらが褒めたモノで殺してやったんだ。あいつらも本望だろうよ、なあ？」

狂気染みた笑みを口元に湛えたまま、トルースは白い少女の小さな頭を引き倒し、ガツと踏みつけながら同意を求めるようなことを、そんな気は全くないままに口にする。ただ、狂気がそこにはあった。「むかつくんだよ、そのツラ」

スイッチを切り替えるように再び低くかすれた声音で、見下しつつ吐く。小さな白い少女は動かない。いや、動けなかった。その小さな頭をグリグリと踏みつけながらに彼は思う。

ああ、そうだ、本当にあの女に似ている。

「もう一度、殺してやるよ!!」

そうして男はナイフを振り上げた。そして事切れる瞬間。

「ごめんなさい」

慈愛を湛えた瞳で、やっぱり少女はそんな言葉を口にした。

( イヤダ )

燦々と雪が降る。ぽつぽつと積もりだす。全てを覆い隠すような雪が血の赤すら飲み込んでいく。

「僕は……」

目の前で赤に染まっていく少女。そんな光景をもう二度と見たく

ないと確かに思っていたのに。

こんなことをしなしたために、今日この場所にきたというのに。なんでこんなことになったのか。

愕然と膝を落として、ブルゾンが力なく呟いた。

「ここに死にに來たのに……」

・・・両親が死んだのは12歳の時だった。

それまでも「故郷なきワヒカの民」と差別されてきたけれど、それでも両親が生きていた頃のブルゾンは、今よりもずっと幸せで、親の庇護を受け、世間の荒波からも守られて暮らしていた。

そう、確かに幸せだった。

その幸せは砂上の城のように、両親の死という出来事で崩れ落ち、鏡が割れるように小さな子供の世界もまた一つ壊れた。強いて言うならそれだけの話だ。

孤児になった少年は色んなものを見た。路地裏で色を売る女に、強姦と暴行を繰り返す男、そのおぼれを狙いへこへこと表面ばかり取り繕う男達。薬を求めてふらつく濁った目をした女に、死体すら食い物にするかのようなケダモノ。親が生きていた頃には自分とは無縁だと思っていたもう一つの世界。

恐かった。全てが幼い少年にとっては恐かった。

生きたかった。死にたくなかった。生きながらに蛆に食われるような、そんなものにはなりたくはなかった。ある日、ゴミ溜めの中で、白く濁った目で腐敗しながら死んでいた人間を見た。あれが自分の末路だなんて思いたくも無かった。

でも、まだ12歳の少年に何が出来る？それも、国無き民であるワヒカ人だ。この国の人間ですらない。そんな子供を雇うような物好きなんていない。だから、彼は、ブルゾンは生きるために犯罪に手を染めた。万引きに置き引き、スリなどを見よう見真似で行った。

そして、散々に殴られて留置所で迎えた朝、彼は施設に送られることになった。哀れな子供を集めた孤児院なのだと言った。

しかし、すぐにそこは孤児院ではなく実験場であることを知ることとなる。

体温が上昇すれば浮かび上がる特別な刺青を彫られ、「15」とそう呼ばれ、人殺しになるための教育を行われた。それを受け入れることも出来ず、彼は何度も逃げた。

「このガキ！いつもいつも逃げやがって」

「誰のお陰で飯が食べていると思ってるんだ、ええ？」

そんな罵倒と共に暴行を加えられた数も一度や二度じゃなかったはずだ。そして、何回かそれを重ねた時、ため息混じりに所長と名乗った男は言った。

「また君かね？15。<sup>トルース</sup>いい加減にしたまえ」

その言葉に、殴られ蹴られ、顔が腫れ上がり、口の中すら錆びた鉄の味がする中、ブルゾンは「人殺しはイヤだ」と、そう己の気持ち伝えた。

そう、人殺しはイヤだった。確かに自分は犯罪を犯した。生きていくためとはいえ、他人の財産を盗んだのだ。死んだ両親に申し訳がないことをしている。死ぬのだって怖い。でもそれでも踏み出しではいけない一線があるのだと、少年は信じていた。

そんな聞き分けの無い子供の姿に、白衣を着た大人はため息をつ。

「仕方ない、新薬を試せ」

そう口にして、少年の腕に薬を打った。

怖かった。少年にとって、そこはとても怖いところだった。

いつか、他の奴らみたいになることも、人殺しになるかもしれないことも、正気を失うことも。

薬を入れられ、おかしくなる体で、それでも必死に少年は耐えていた。

エリンガス人以外の孤児が集められた此処では、人殺しとスパイのための授業が毎日行われる。



そんなある日、彼は一人呼び出された。

「ネズミだ」

そういつて、ドサリと目前に置かれたのは、自分と同年くらいの白い少女だった。

両手足を縄で後ろ手に縛られた、儂い印象の白い少女。それを前に、大人たちは少年にナイフを一つ渡して言った。

「さて、君は未だ実戦したことがないんだってね。コレの始末は君がやりたまえ。15君<sup>トルース</sup>」

優しくさえ聞こえる猫なで声で、そんな言葉を言う。カタカタと、少年の未だ小さな体が震えだす。

ネズミ……だって？どこが。だって、これは人間だ。人間の女の子だ。

「いつ、イヤだ」

その少年の返答に、男の声のトーンが下がった。

「今まで充分我々は我慢したんだよ？15君<sup>トルース</sup>。白の間に送られたいか？」

その言葉に凍りついた。白の間、つまり精神が壊れるまで続けられる薬の実験場。そこに送られて正気で戻った者は無い。良くて廃人、悪くて死ぬ。死ぬ。そう、死んでしまう。路地裏でゴミのように死んでいた彼らのように。腐って、落ちる。

カタカタ、カタカタとナイフを握る手が震える。じつとりと汗が背中を伝う。口の中はからからで、唾さえ出てきやしない。

「さあ良い子だから。君だって死ぬのはイヤだろう？」

そして、目の前の白い少女は……。

「ごめんなさい」

愁いを帯びた青い目でそんな言葉を口にして、ブルゾンを見ていた。

その後のことは覚えては居ない。結果として、少女は死に、彼は手を血の赤に染めて、大人たちは彼を生かすことに決めたというそれだけの話だ。

彼は自分のために人を殺した。

それからは仕事のたびに、その間の記憶を失い、仕事が終われば自分に戻るといふ、そんな生活を1年近く続けていた。

そして、彼は新しく入ってきたまだその手を血で汚していない少年、18、イクオンと共に此処を去る決意をする。初めて自分の意思で自分を放棄して、意識が戻った時には全てが終わっていた。

遠く燃える施設を見て、嗚呼もう人を殺さなくていいんだ、そんな安堵を抱いていた。

そうして5年が経った。

彼は18の刺青を右手に彫られた少年と、擬似家族として共に暮らしていた。あれからの日々はかつての体験が嘘のように穏やかで、優しい日々だった。

ある日、仕事に出かけていたはずのイクオンは、息を切らしながら駆け戻ってきた。

「イクオン？どうした」

珍しい弟分の姿に驚きつつ、彼の分の白湯を用意しながら言うブルゾンに、18の少年イクオンは、おそらくは仕事先で貰ったのだろう新聞を手に、怒りに満ちた目で彼に詰め寄った。

「お前なのか？」

「え？」

何を言っているのかわからず戸惑うブルゾンに、更に腹立たしげに新聞を広げ、少年は怒鳴った。

「この犯人はお前なのかと聞いたんだ。15・ブルゾン！！」

そのイクオンが広げた記事にのっていた顔写真と『満月の夜の殺人者』、それで理解した。

記憶もなく、彼はまた15トルースになっていた。悪夢は、人殺しは終わりじゃなかったんだ、と。

「だけど、あいつも僕だ。鏡の向こうの僕に違いないんだ！！」

ダン、と雪に埋もれた地面を拳で叩きながら、心からの声で叫ぶ。「貴方が悪いんじゃないわ。悪いのはわたし」

それに、殺した筈の音が聞こえた。ノロノロと彼は顔を上げる。そこに彼女はいた。先ほどまでの童女の姿ではなく、慈愛の籠った眼差し、青い目をした白き淑女。ふわりとした白銀の髪に、白いワンピースを身に纏った大人の女。

かつて殺した女。

「答えてくれ。……お前は幻覚なのか？」

「いいえ、わたしは六花<sup>りっか</sup>」

ぱらりと、雪が降る。彼女の正体を暗示するように。

「わたしはこの山の守り神。わたしはこの山の秩序を守るもの」

「わたしは雪女<sup>ユキメユメ</sup>」

「雪……女？」

呆然と、呟く男。それに、山の神を名乗った女はサクリと、素足のまま雪の上を歩き、そつと青年の頬に手を伸ばした。華奢で小さく美しい白魚の手は冷たく、体温を感じない。その手が優しく男の頬を包み込む。

「わたしは貴方を助ける筈だったのに貴方を苦しめた。だから私は貴方に謝らないといけない」

厳かな雰囲気、神聖な誓いを交わすかのように言葉を紡ぐ白き女。青い瞳は慈愛と愁いを湛え、ブルゾンの全てを捉える。そうだ、確かにその様は人外の化生であった。

彼女こそが、この山の神だった。

「……わたしは山の秩序を乱したあの男達を断罪するつもりだった」

「……じゃあ、なんで……」

疑問の声は、ふと哀しげに続く女の声に覆われ、包まれていく。

「雪女といっても大した力は持っていないの。せいぜい道をいくつか潰しただけ。私があいつらに捕まるのは誤算だったけど、私が貴

方に一度殺されたことが全ての始まりなら、何度でも謝るわ」

そうしてリシューリアは、彼の耳元で囁いた。

「え？」

「・・・生きているの。あの日貴方が見殺しにしたと思っていて、数字持ちの子供達。全員私が助けた。だから、貴方が死ぬ理由なんてないの」

それは本当に？震えるままにぼろりと右目から涙が一滴流れた。白き女はそんな男をそっと抱きしめる。それはまるで、母親が我が子を抱きしめるかのような慈愛に満ちた行為だった。

「でも他にも僕は・・・人を襲った」

「眠って、ブルゾン」

深々と雪が降る。降り積もっていく中、歌うように少女の声が優しく男の耳へと届いていく。全てが白に染まる、染まりゆく。此処は揺り籠。男は、母親の胎内へと回帰する。そう錯覚するほどに、その化生は優しくかった。

「わたし、歌を謡うわ。そうして、次に目覚めた時には、貴方は唯  
ルン  
一人」

じわりと、言葉が胸に沁みていく。

嗚呼、彼女がそういうのなら、きつとそれは本当なのだろう。それを信じて男は六花に身をゆだねた。

\* \* \*

朝日が昇る。それを合図に人々もまた何もなかったかのように日々の営みを開始する。それは噂話くらいしか娯楽の無いこんな寂れた田舎町だつて同じだ。何も変わらず町は今日も忙しくまわっていく。そんな中、ワヒカ人の男が一人、店先で借りた電話ボックスで話をしていた。

「ああ、うんそつだ。なんでお前、泣いてるんだよ、イクオン。今更だろ」

すれ違った人々に、5分と経たず忘れられてしまいそうなほどに特徴の無い顔立ちをした青年は、ふつと口元を綻ばせながら、電話先の弟分に向かって穏やかに声をかけていた。

「大丈夫だ、僕はもう死のうなんて思っていない。ああ………うん、じゃあな」

ガチャリと、電話を切って店主に代金を払う。そうして店の外に出た。

「終わった？」

そこに少女がいた。ふわふわの白髪に、大きな妖精の羽を思わせるリボンが背中についた白いワンピースを身に纏った、紅い目の6歳ほどの女の子。

「ああ」

それに答えて、青年は彼女の隣を歩みだした。

「お前の言ったとおり、僕が去った時残っていたメンバーの生存が確認できたよ」

「そつ」

「僕は自首する」

それに少女は答えない。構わず青年は言葉を続けた。

「たとえ自分の意思でなくても僕が人殺しに変わりないし、施設が無くなった後も人を襲い続けたのは僕が弱かったからだ。でもだからってあいつらの事を有耶無耶にする気もない。全て話す」

「そつか」

自分が言っている内容を前に唾を飲み込む。無理やりに調子を上げて、残りの言葉も言い切る。

「18<sup>トフツ</sup>たちも証人になってくれると言ってるし、裏もいくつか取ってくれてるみたいだから、すぐに消されたりしないだろうけど、やっぱり危ないかな。はは……」

くしゃりと髪を掻き揚げ、空気に笑いながら、それでもブルゾンのその声は僅か震えていた。

「そうね。けど、ブルゾンが決めた事ならわたしは何も言わないわ」  
少女は有りの儘を受け入れるようにそう口にする。紅い瞳は全てを見ているかのようだ。

「・・・なあ」

カタカタと、震えだす手。

「もしも」

それを少女の肩に伸ばしながら、男は果たされないだろう夢物語を、縋るように口にした。

「もしも僕が刑務所から出れたら、その時は・・・また歌ってくれるか？」

夢だった。内心ではわかっていた。そんなに世の中は甘くはない。自分がやってきたことなど、あの過去ごとくもみ消されるのがオチだ。それでも、それでも・・・縋る対象を彼は欲していた。

「ええ、必ず。ずっとその日を待っているわ」

果たして、少女は笑った。慈愛の瞳で微笑みながら、おそらくは果たされないだろう約束をしてくれた。ふ、と目元だけで青年は笑う。嗚呼、これで漸く自分は歩ける。たとえ、この先に待っているのが破滅だろうと、彼女との約束さえあれば進めるとそう思った。

背中を向ける。振り向かない。振り向かずに歩く。もう彼女と時間が交わることはない。それでもこの約束さえあれば、彼は歩いていけるだろう。それだけで青年は救われたのだから。

ふわりふわりと雪が降る。小さな町も、警察署も全てが白く染まっっていく。

そんな中で、六花の少女は、小さくなる男の小さな背中を見送り、山の上から町を見つめていた。

了

(後書き)

ご読了いただきありがとうございます。

尚、おまけでブルゾンとイクオンのラファイラストをつけさせていた  
だきます。

> i39049 | 3032 <



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5177ba/>

---

六花の少女

2012年1月14日12時59分発行